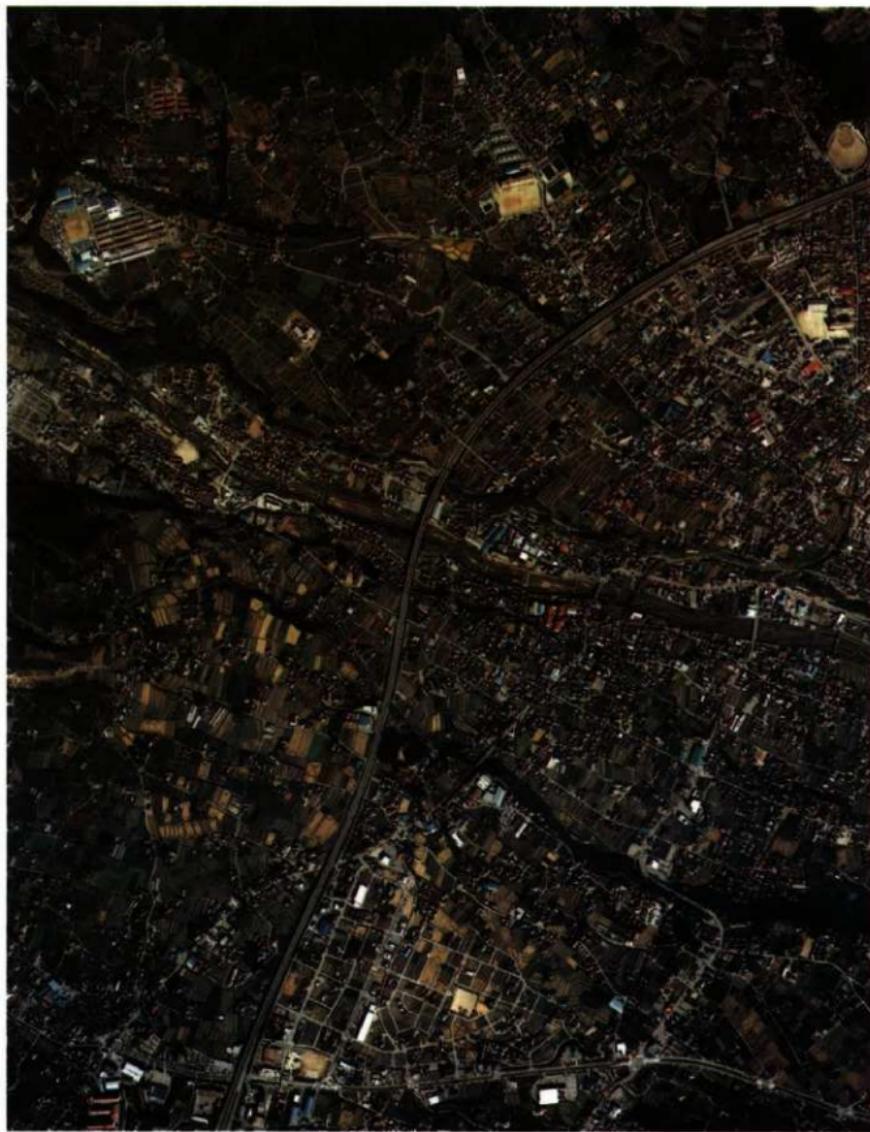


ごん げん どう まえ い せき
權 現 堂 前 遺 跡

2004年3月

長野県飯田市教育委員会



権現堂前遺跡空中写真

(写真斜めに走るのが中央自動車道、中央やや上の森が元山白山社)

平成4年11月撮影 S = 1 / 12500



遺跡遠景（中央の山が風越山）



SD01 遺物出土状況

序

飯田市は「人も自然も美しく、輝くまち飯田－環境文化都市－」として基本計画に示すとおり、山紫水明の自然に恵まれ、原始古代より多くの人々が生活を営んできた地域であります。しかし、この飯田市に於いても地域社会の発展のため、今まで埋蔵されていた埋蔵文化財が開発工事により手をつけざるを得ない事態が生じてきております。本来ならば過去から今まで保存してきたのと同様に地中に保存していくのが最前の方策でありますが、次善の策として発掘調査を行い記録保存することによって後世に埋蔵文化財を残すことはやむを得ないことと考えております。

今回発掘調査を実施した権現堂前遺跡は、飯田市羽場地区に所在し、県内でも初期に方形周溝墓が発見された著名な遺跡であります。この遺跡内に市道が新設されることになり発掘調査を行いました。この調査により縄文時代晚期終末の土器や弥生時代・平安時代の住居址が発見されました。縄文時代の土器は東海地方と深く結びついたものであり、当時も頻繁な交流があったことが伺えます。このような成果の積み重ねによって地域の再構築が行われ、ひいてはその成果が私たちの生活に還元されていくものと考えられます。

最後になりましたが飯田市関係部局には調査実施にあたり文化財保護の本旨に厚いご理解を賜りました。また、地元の皆様、現地・整理作業に従事された作業員の皆様に深甚なる謝意を申し上げます。

平成16年3月

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰啓

例　言

1. 本報告書は、市道飯田514号線道路改良工事に先立ち実施された、飯田市羽場地区所在の埋蔵文化財包蔵地、権現堂前遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会が直営で行った。
3. 調査は、平成14年度に現地調査・基礎整理作業を、平成15年度に整理作業及び報告書刊行を行った。
4. 飯田市では昭和63年度～平成9年度に埋蔵文化財詳細分布調査を行い、從来の遺跡範囲及び名称を変更した。昭和45年度に中央自動車道西宮線建設に先立つ発掘調査に於いて権現堂前遺跡を調査しているが、今次調査は旧来の範囲及び名称の変更の理由から遺構番号は連番とせず、新規とした。
5. 発掘調査及び整理作業には、GGM1190-3の略号を用いた。また、遺構には以下の略号を用いた。
堅穴住居址：SB　溝址：SD　集石：SI　土坑：SK
6. 権現堂前遺跡における発掘調査位置は日本測地系である国土基本図の区画、VII-LC74-3に位置し、(社団法人日本測量協会 1969 「国土基本図図式 同摘要規定」参照) グリッド設定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図(日本測地系)に基づいて、佛ジャステックに委託した。
7. 本書の記載については遺構の順とする。遺物図・写真図版は本文末に一括した。
8. 土層観察については、小山正忠・竹原秀夫 1996 『新版標準土色帖』による。
9. 遺物実測図の縮尺については、下記のとおりである。
土器：復元実測図1／4・拓本及び断面図1／3
石器：小形石器2／3・他1／3
10. 土器実測図に於ける土器内面のドットは内面黒色を示す。土器断面の斜走単線は纖維土器を、ドットは灰釉陶器をそれぞれ表現し、石器実測図中の網掛けは摩耗を示す。
11. 遺物写真は、西大寺フォト 杉本和樹氏に依頼した。
12. 本書は吉川金利が執筆・編集し、吉川 豊・小林正春が校閲した。
13. 本書に関連する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館で保管している。

目 次

本文目次

序

例言

目次

I 調査経過

- 1 調査に至る経過 1
- 2 調査経過 1
- 3 調査組織 1

II 遺跡の環境

- 1 自然環境 3
- 2 歴史環境 3

III 調査結果

- 1 基本層序 9
 - 2 穫穴住居址 (S B)
 - ① S B01 10
 - ② S B02 10
 - 3 溝址 (S D)
 - ① S D01 10
 - ② S D02 12
 - ③ S D03 12
 - ④ S D04 12
 - ⑤ S D05 14
 - ⑥ S D06 14
 - ⑦ S D07 14
 - 4 土坑 (S K) 14
 - 5 集石土坑 (S I) 17
- IV 総括
- 1 SD01出土土器について 21
 - 2 弥生時代について 21
- 報告書抄録 50

挿図目次

- 挿図 1 調査遺跡位置図 (8)
- 挿図 2 調査位置図 4
- 挿図 3 周辺遺跡位置図 5
- 挿図 4 造構分布図 7・8
- 挿図 5 基本層序 9
- 挿図 6 SB01 10
- 挿図 7 SB02 10
- 挿図 8 SD01 11
- 挿図 9 SD02~07 13
- 挿図10 SK01~SK11 15
- 挿図11 SK12~14・SI01 16
- 挿図12 周辺ピット(1) 17
- 挿図13 周辺ピット(2) 18
- 挿図14 周辺ピット(3) 19

図版目次

- 第1図 SB01・SB02出土遺物 25
- 第2図~第8図 SD01出土遺物 26~32
- 第9図 SD01・06・07、SK03・14、
造構外出土遺物 33
- 第10図 造構外出土遺物 34
- 第11図 SD01・07出土遺物 29

写真図版目次

- 巻頭図版 (3)・(4)
- 調査区全景・造構 39~43
- 遺物 44~49



擇図1 調査遺跡位置図

I 調査経過

1 調査に至る経過

平成12年度に市道飯田514号線建設の計画が飯田市建設部都市整備課から教育委員会に提出された。当該地は埋蔵文化財包蔵地権現堂前遺跡内であるため、同年10月17日に開発側と教育委員会の二者による埋蔵文化財保護協議を行った。協議の結果、工事に先立ち試掘調査を実施し、その結果に基づき改めて協議をすることとした。

平成14年4月10日に試掘調査を行い、中世期と考えられる土坑及び繩文・弥生土器及び石器が確認された。この試掘結果を受けて再度、二者による保護協議を行ったが、設計変更等は不可能との結論に達し、開発対象地の発掘調査を行い、記録保存することとなった。

2 調査経過

以上の経過を経て、平成14年7月1日付で飯田市建設部と飯田市教育委員会との間で埋蔵文化財発掘調査委託費用負担協定書を締結し、現地での発掘調査に着手した。調査区が道路建設部分と云うことで、排土処理の関係から都合三回に分けて調査を行った。よって断続的に、重機による表土剥ぎ・基準点測量・作業員による遺構検出及び掘削作業・写真撮影を行った。同年9月24日に現地での作業を終了し、その後図面・写真類の整理、出土遺物の水洗・注記等基礎的整理作業を平成14年度中に行った。

今次調査区の北側の工事対象地点は平成14年12月10日に試掘調査を行ったが、湿地であり、遺構・遺物が確認されなかったため発掘調査は不要と判断した。

平成15年度は遺物の復元・実測・トレース、遺構の第2原図作成・トレース等を行い、報告書作成を行った。

3 調査組織

(1)調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 富田 泰啓

調査担当者 坂井 勇雄 佐々木嘉和 吉川 金利

調査員 馬場 保之 滝谷恵美子 伊藤 尚志 羽生 俊郎

作業員 伊藤 孝人 熊崎三代吉 佐々木一平 代田 一登 杉山 春樹

竹本 常子 橋 千賀子 服部 光男 松下 成司 三浦 照夫

(2)事務局

飯田市教育委員会

教育長 富田 泰啓

教育次長 久保田裕久（～平成14年度） 尾曾 幹男（平成15年度～）
生涯学習課課長 中島 修（～平成14年度） 小林 正春（平成15年度～）
生涯学習課文化財保護係 係長 小林 正春（～平成14年度） 吉川 豊（平成15年度～）
馬場 保之（文化財保護係） 滝谷恵美子（文化財保護係） 吉川 金利（文化財保護係）
佐々木行博（文化財保護係平成15年度～） 伊藤 尚志（文化財保護係～平成15年9月）
坂井 勇雄（文化財保護係～平成14年度） 羽生 俊郎（文化財保護係）
学校教育課庶務係長 高田 清（～平成14年度）
宮田 和久（庶務係）（～平成14年度）

II 遺跡の環境

1 自然環境

飯田市は赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山脈と木曽山脈（中央アルプス）に挟まれた伊那谷の南端に位置する。谷の中央部には天竜川が南流し、天竜川とその支流によって形成された河岸段丘と、断層地塊運動に伴う大規模な段丘崖、各支流による扇状地が絡み合って、複雑な地形を呈している。権現堂前遺跡の所在する飯田市羽場地区は、東は阿弥陀沢川から西は飯田松川まで、南はJR飯田線から北は市境界までと山林地域が多いが、隣接する丸山地区と合わせて「上飯田」と呼称され、橋南・橋北地区と共に飯田市の中心地区として発展してきた場所である。

地形的には、飯田松川・円悟沢川・阿弥陀沢川によって形成された扇状地に存在する。その扇状地は新期扇状地に属し、円悟沢川以北はb1面【中村面】、円悟沢川以南はb2面【桐林面】、元山白山神社（権現堂）以西はb3面【伊久間面】にそれぞれ比定されている。

権現堂前遺跡は、北は円悟沢川、南は飯田松川による段丘崖、西は元山白山神社下の段丘崖、東は中央自動車道西宮線までとなっており、前述した扇状地のb2面上に位置する。このb2面上には北から権現堂前・方角東・箕瀬遺跡と遺跡が連続する。また、土層堆積状況は、過去の埋蔵文化財発掘調査成果から扇央部分に当たる権現堂前・方角東遺跡では現地表面から1.5~2mまで砂礫層で、その下層にローム層が、扇端部にあたる箕瀬遺跡では60~90cmでローム層になることが確認できる。

2 歴史環境（挿図3）

飯田市羽場地区は、昭和40年代後半の中央自動車道西宮線（以下、中央道と略す）建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査が行われて以来、本格的な発掘調査が少なく、調査成果から歴史環境を述べるのは困難を要する。よって周辺地区の様相も交え概観することとしたい。なお、前述した如く詳細分布調査の結果、従来の範囲及び名称を変更した遺跡がある。よって以下記述する遺跡名は新名称を用い、調査・報告時と異なる遺跡については（ ）で旧名称を示す。また、遺跡名及び古墳名右の〔 〕内の数字は挿図3「周辺遺跡位置図」の番号に対応する。

旧石器時代は当地区のみにあらず、飯田市では調査例に乏しく、中央道建設に先立つ山本地区の石子原遺跡・三遠南信自動車道飯喬道路建設に先立つ山本地区的竹佐中原遺跡で見られる程度である。飯田市美術博物館建設に先立つ飯田城址発掘調査の際には、細石刃核が出土している。

縄文時代になると、発掘調査例は少ないものの断片的な遺物の出土報告例が増加する。早期の押型文土器片が権現堂前（湯渡）遺跡〔2〕・正永寺原遺跡で出土したことが報告されている。中期は、療養施設建設に伴う箕瀬遺跡〔3〕の調査に於いて中期後葉の堅穴住居址が検出されている。遺物としては、権現堂（平沢）遺跡〔4〕で五領ヶ台式併行及び唐草文系土器が、正永寺原遺跡〔5〕では藤内式併行の土器が耕作中に出土したことが報告されている。今次調査に於いても最終末の結節縄文土器が出土し

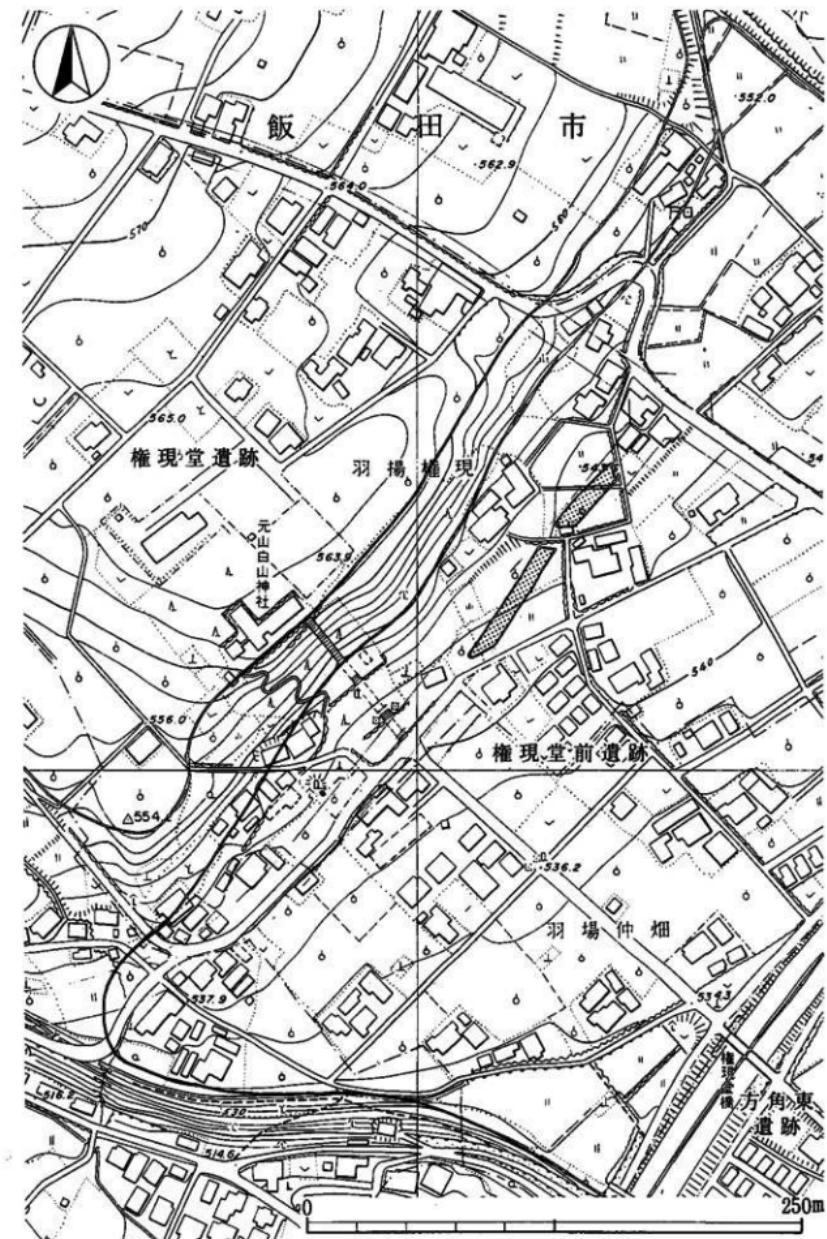


図2 調査位置図



挿図3 周辺遺跡位置図

ている。後・晩期では権現堂前（湯渡）遺跡〔2〕から大量の土器・石器・土製品が土壤改良時に出土し、大休（正永寺原）遺跡〔6〕からは該期の土壙墓が検出されている。今次調査では晩期終末の水式土器併行の遺物が出土した。

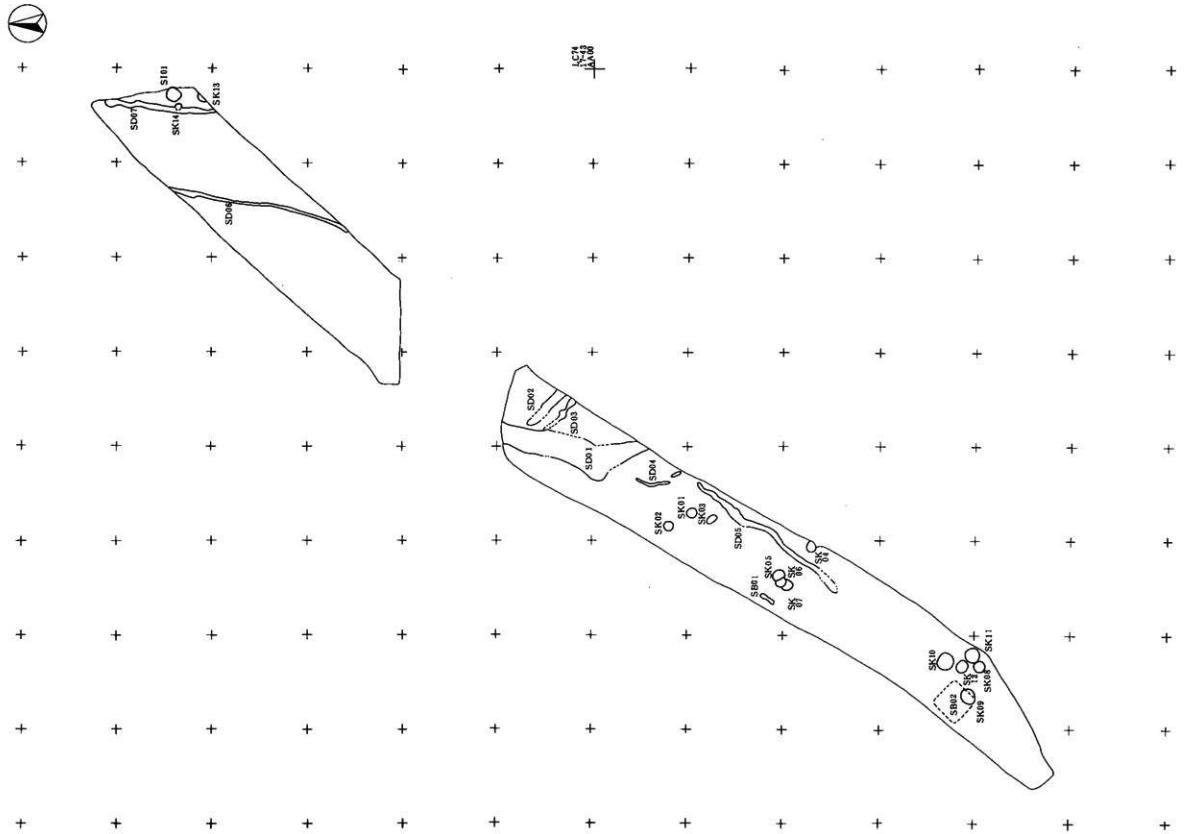
弥生時代は、本格的な発掘調査により遺構・遺物が確認されている。方角東（さつみ〔7〕・権現堂前〔8〕）遺跡では中央道建設に先立つ発掘調査に於いて、長野県初の方形周溝墓の全容を解明した。方形周溝墓は計2基、竪穴住居址は計6軒検出され、出土遺物から中期後葉に位置づけられている。また区画整理事業に先立つ調査では、後期の方形周溝墓が2基検出されている。同事業に先立つ羽場曙遺跡〔9〕では後期前半に位置づけられる竪穴住居址が3軒、方形周溝墓が9基確認されている。他に権現堂（平沢）遺跡〔4〕・権現堂前（湯渡）遺跡〔2〕では後期の土器が出土している。今次調査でも同様、同期の竪穴住居址及び、遺構外ではあるが後期の土器片が出土している。こうした高燥段丘上の遺跡立地は同様な伊賀良・上郷黒田地区等でも同様な状況を示し、小規模な水田と陸耕を生産基盤とした集落経営が看取される。いずれも沖積地等の低地にみられるものと異なり、短期間に集落であることが解明されている。

古墳時代はその象徴事象としての古墳が構築されるが、当地区には4基の存在が確認されている。そのうち木戸脇古墳〔10〕が唯一部分的に残存しているにすぎない。集落は現在では確認されていないが、隣接する丸山遺跡〔11〕では道路建設に先立つ調査で、前期から中期の竪穴住居址8軒が確認されている。権現堂前（湯渡）遺跡〔2〕では該期の土器片が出土しているようである。立地条件が同じ他地区の様相も当地区と同様で、小規模な集落が単発的に形成されていたようであり、該期の中心は座光寺恒川地区・上郷飯沼地区等の低地の地区である。

続く奈良・平安時代は古墳時代同様、詳細は不明であるが、今次調査で平安時代の竪穴住居址が1軒検出された。箕瀬遺跡〔3〕に於いても同期の竪穴住居址が4軒確認されているが、該期も古墳時代同様、小規模な集落が散在していたと思われる。

中世以降は飯田城・愛宕城〔12〕・城山〔13〕・虚空蔵山頂〔14〕に山城が造られ、一定の集団による生活の営みが推測される。現飯田市街地は近世に於ける飯田藩主京極・駿坂・堀氏の居城である飯田城に起因した城下町が基盤になっている。飯田城及び城下町の様相は前述した飯田城址発掘調査・市街地再開発事業に先立つ飯田城下町遺跡〔15〕発掘調査等で次第に明らかになってきた。詳細は同発掘調査報告書を参照していただきたい。

以上のように権現堂前遺跡の所在する羽場地区は、縄文時代以降連綿と人々の営みが続いてきた地区であり、今次調査の成果もそれを裏付けるものである。

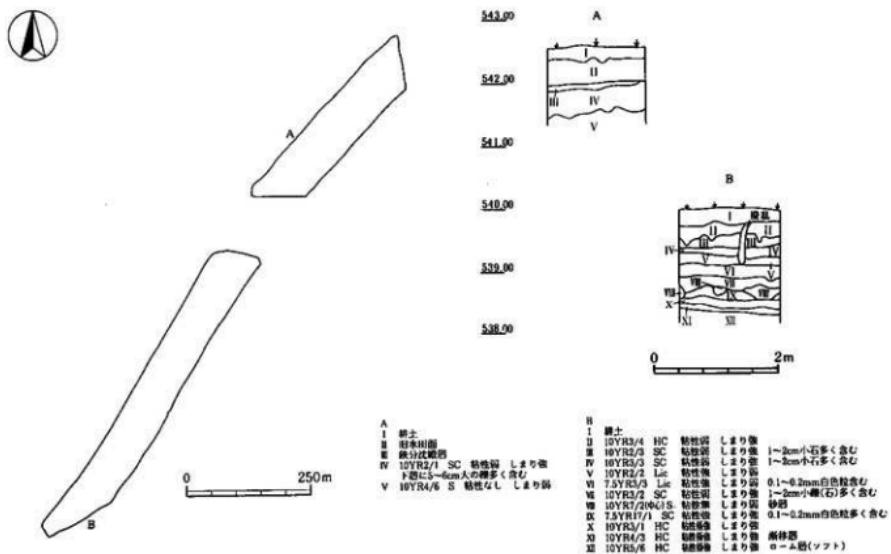


擇図4 遺構分布図

III 調査結果

1 基本層序（挿図5）

調査区北・南側で採取した。それぞれ対応しないため、各地点で土層を記している。未調査部分以北の調査区では、10YR 4/6 S (AのV層) が遺構検出面であり、未調査部分以南の調査区北側は、10YR 7/2 S (BのVII層)・南側は10YR 5/6 HC (BのXII層) が遺構検出面である。全般的に砂礫層及び砂層で幾度にも及ぶ土石流を受けたことがわかる。



挿図5 基本層序

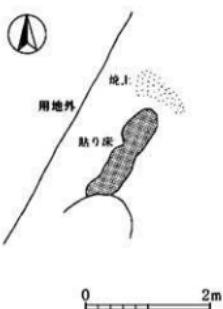
2 積穴住居址 (SB)

① SB01 (挿図6・第1図)

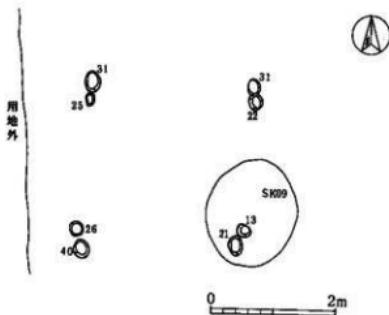
A w-48付近で検出した。他の遺構検出時に灰釉陶器及び須恵・土師器片が出土し、硬質な床面を検出した。改めて周辺を精査したが、床面や住居内施設は検出できなかった。よって規模・主軸方向等は不明である。

出土遺物は土師器壺・須恵器壺・灰釉陶器碗・灰釉陶器皿・土師器甕がある。多くが床面と思われるレベル面から出土している。

出土遺物から平安時代（9世紀後半）に位置づけられる。



挿図6 SB01



挿図7 SB02

②SB02(挿図7・第1図)

B g-16付近で検出した。SK09に切られる。主柱穴と思われるビットを8基検出したのみで、床や住居内施設等は確認できなかった。よって規模・主軸方向等は不明である。主柱穴の状況から改築がなされたと考えられる。

主柱穴から壺形土器の頸部片が出土した。

出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

3 溝址(SD)

①SD01(挿図8・第2~9・11図)

A a-29を中心として検出した。方向はN19°Eで途中N18°Wに方向を変える。重複関係はない。調査延長16.5mで、最大幅2.5m・最小幅1.8m、最深部0.9m・最浅部0.5mを測る。前述した土層でプラン検出をして調査したが、土層断面図からわかるように、本址は南東側にも延びていたが、全ては調査できなかった。覆土はそのほとんどが砂礫・砂層であり、断面形や覆土の状況から自然流路と考えられる。

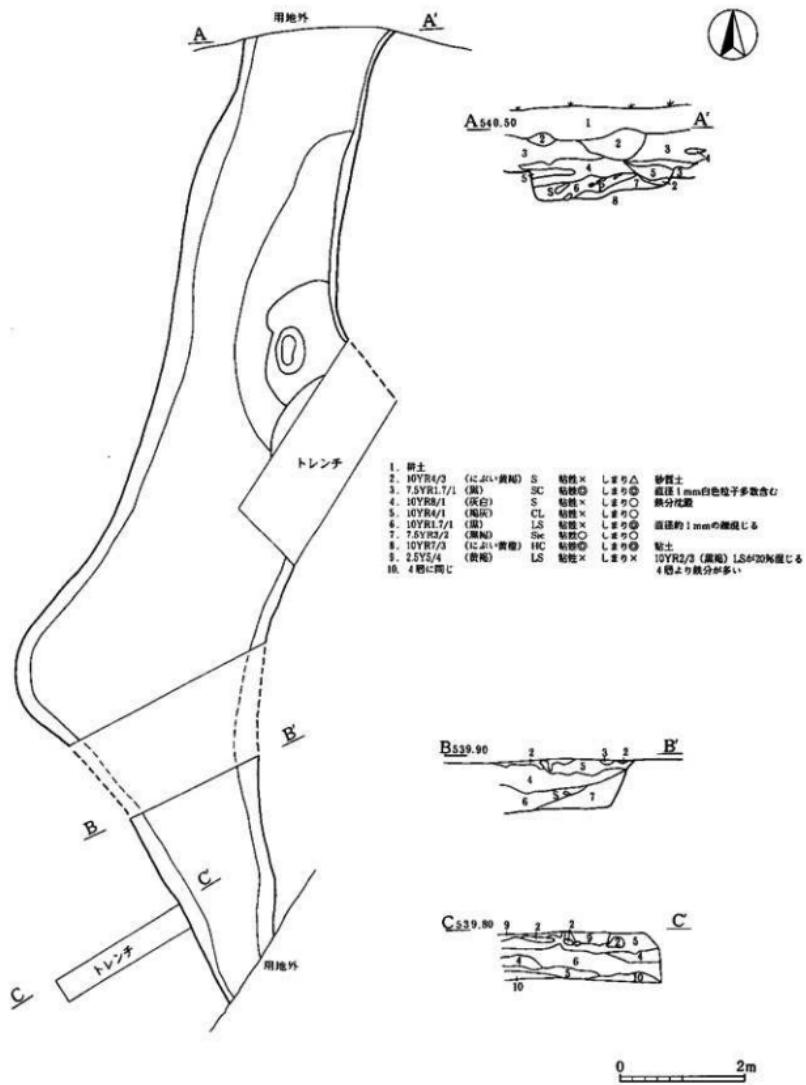
遺物の出土位置は最北端部分が特に多く、層位は6層が一番多く、次いで4層が多い。層位により遺物の時期差はなく、混在した状況で出土した。

出土遺物は縄文時代晚期終末の土器を主体として、縄文時代中期・後期、弥生時代後期、古墳時代の遺物が出土している。

縄文時代晚期終末土器の主体は東海条痕文系土器に比定される土器群である。よって絶対的な出土量も多い。壺形土器(5-12~28)は器面全体に条痕文が施される。条痕方向は右傾斜が多く、横位・縦位・左傾斜の順となる。6-37は二枚貝状の施文具で施文した後、等間隔に棒状工具で深く刻んでいる。壺形土器(7-3~15)は口縁部に押圧突帯を施し、器面全体に条痕施文する。口唇部に刻み(7-4)や押圧突帯が肩部に施文されるもの(7-7)もある。

水式土器に比定されるものもある。なお、器種分類については(小林・宇佐見 1998)に準拠し、壺形土器は胴部に屈曲を持つもの、深鉢形土器は屈曲を持たない深い鉢とした。

浮線文(2-1~12)や前者の浮線文を沈線にて表現した浅鉢形土器(2-13・14)、横位沈線を用



擇図8 SD01

いた浅鉢形土器（2-15・16）がある。

甕形土器は肩部に稜を持ち胴部に細密条痕を施すもの（2-17～25・3-2、2-22・23は同一個体）、同器形。同文様で胴部に稻妻状文が施されるもの（2-17～21）がある。2-18は胴部地文が条痕であり、稻妻状文か否かは微妙である。4-4・6・7は口外帯が退化したものである。

深鉢形土器は、口縁部に円形の押圧文を施し以下に細密条痕を施文するもの（3-1）、口唇部が微妙に波状となり口縁部に無文帯を持ち、肩部に4条の横位沈線を巡らせ以下細密条痕を施すもの（3-3）がある。4-18・19は同一個体であるが、口唇部内側に突帯と言うべきか、円形の押圧文を施し、器面はケズリ調整したものである。4-5は口外帯が形骸化したものと考えられる。

壺形土器は口縁部に沈線文が施されたもの（7-1）、無文のもの（7-2）、波状の口外帯を持つもの（4-8）があるが、壺形土器と認識できるものは少ない。

その他として、部分的な破片のため具体的な器形が不明なものが多いが、4-13～17は、口唇部に刻みを持ち、頸部は無文の土器群である。4-21～27は口縁部に1～4単位の横位沈線を施すものである。4-28～30・5-10は口縁部に2条の幅広凹線を施すものである。前述したこれらは多くが甕形の器形と思われるが、詳細は不明である。4-11・12は、口唇部に突帯文が施文されるものであるが、東海系条痕文土器の突帯とは異なっており、所謂在地型突帯文土器と呼ばれるものの可能性がある。

該期の可能性がある遺物としては、石剣（11-19）・耳栓（8-36・37）が出土している。

縄文時代晚期以外の遺物としては縄文時代中期終末の結節縄文土器（8-21）、同後期土器（8-22～35）、弥生時代後期土器（8-38～40・9-1～11）、古墳時代土器（9-12）がある。

遺構の時期は自然流路ということもあり、断定できないが、縄文時代晚期以降に形成されたものと思われる。

② S D02（挿図9・第11図）

A c-32を中心として検出した。方向はN44°Wを示す。重複関係はない。規模は調査延長5.1m・最大幅1.3m・最小幅0.8m、最深部0.3m・最浅部0.2mを測る。断面形は弧状である。遺構の性格は不明である。

出土遺物はない。

遺構の時期は不明である。

③ S D03（挿図9）

A b-31を中心として検出した。方向はN45°Wを示す。重複関係はない。規模は調査延長4.5m・最大幅0.8m・最小幅0.1m、最深部0.4m・最浅部0.3mを測る。断面形は逆台形及びV字状であり、自然流路と考えられる。

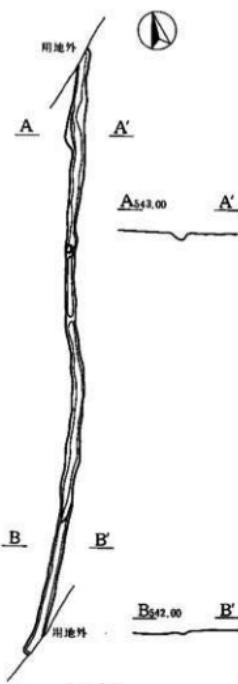
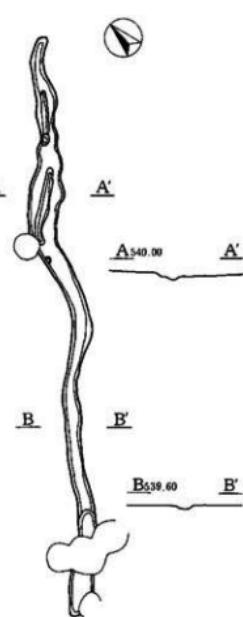
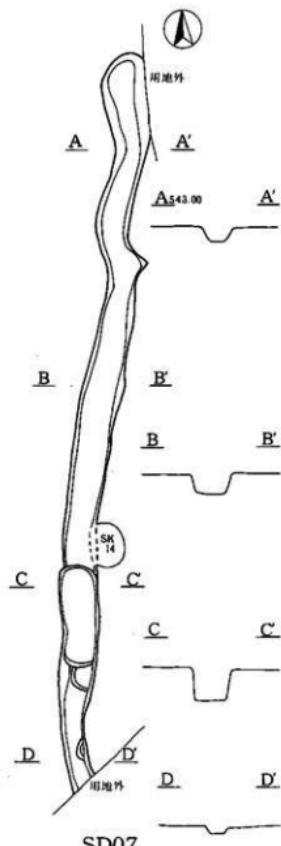
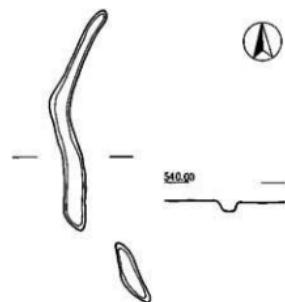
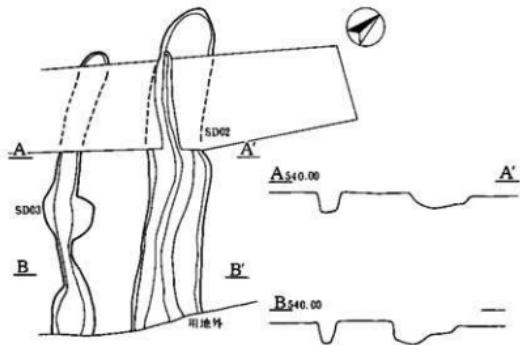
出土遺物はない。

遺構の時期は不明である。

④ S D04（挿図9）

B v-27を中心として検出した。方向はN32°Wを示す。重複関係はない。規模は調査延長4.8m・最大幅0.4m・最小幅0.2m、最深部0.2m・最浅部0.1mを測る。途中で一端途切れる。断面形は逆台形であり、自然流路と考えられる。

出土遺物は、図示出来ない程度の縄文土器片がある。



0 2m

挿図9 SD02~07

遺構の時期は不明である。

⑤ S D05 (挿図9)

B s - 26を中心として検出した。方向はN35° Eを示す。重複関係はない。規模は調査延長18.5m・最大幅1.2m・最小幅0.3m・最深部0.3m・最浅部0.1mを測る。断面形は逆台形であり、自然流路と考えられる。

出土遺物はない。

遺構の時期は不明である。

⑥ S D06 (挿図9)

A t - 43を中心として検出した。方向はN11° Eを示す。重複関係はない。規模は調査延長19m・最大幅0.6m・最小幅0.2m・最深部0.9m・最浅部0.3mを測る。断面形は逆台形であり、自然流路と考えられる。

出土遺物は弥生時代後期の菱形土器片と図示できないほどの縄文晩期土器片がある。

自然流路のため、遺構の時期は不明である。

⑦ S D07 (挿図9・第9・11図)

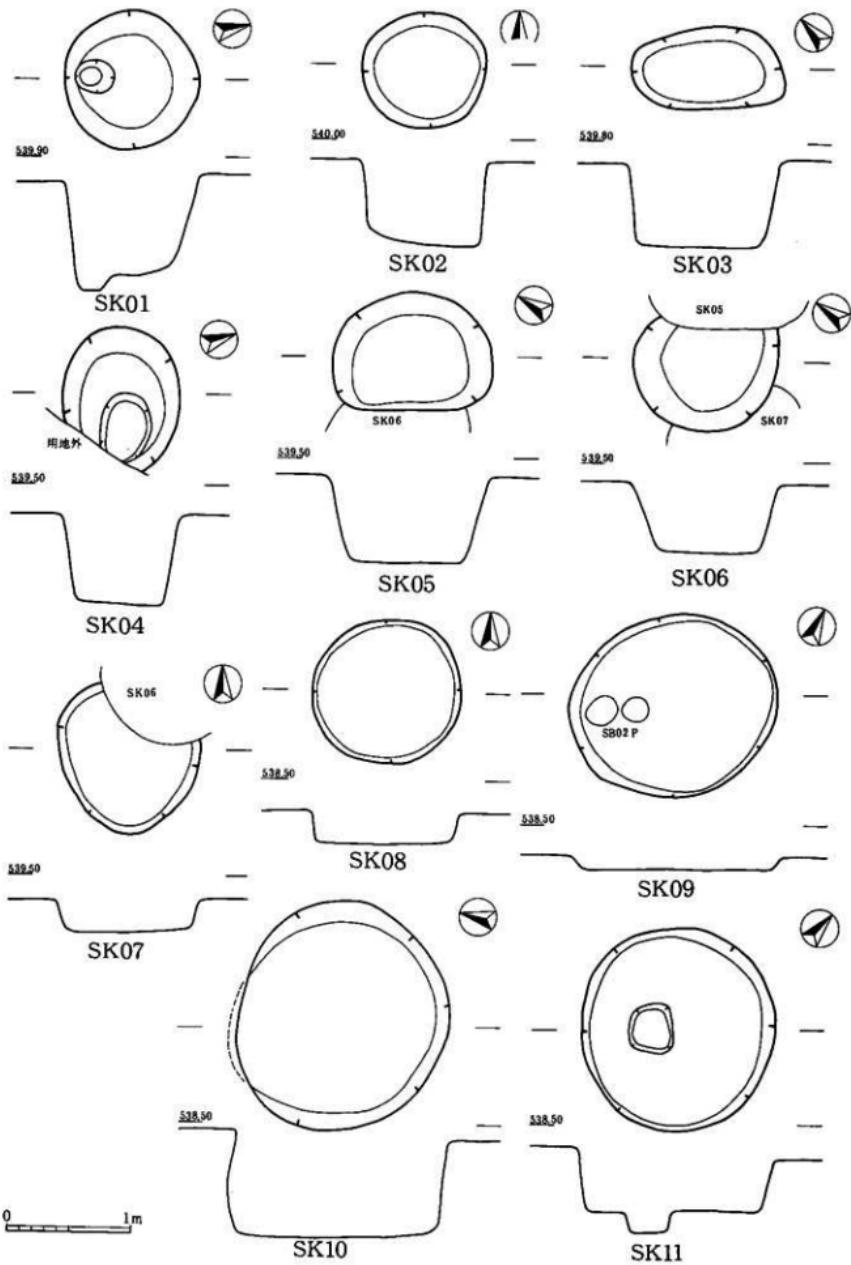
A w - 47を中心として検出した。方向はN 4° Eを示す。SK14を切る。規模は調査延長11.8m・最大幅0.8m・最小幅0.4m・最深部0.5m・最浅部0.1mを測る。断面形は逆台形であり、自然流路と考えられる。

出土遺物は縄文時代中期後葉の土器片と打製石斧・石剣及び、図示できない程度の縄文時代晩期土器片がある。

自然流路のため、遺構の時期は不明である。

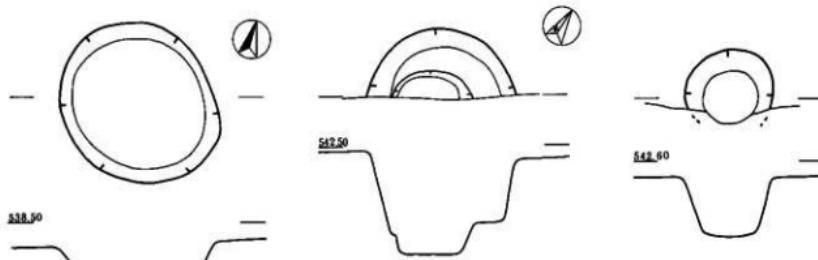
4 土坑 (SK)

No	図	検出位置	規 模 長×幅×深 cm	横 幅 cm	平 面 形	断面形	重 複 関 係	出 土 遺 物	時 代 時 期	備 考
01	10	Bt-26	111×108×92	円形	逆台形	なし		灰輪長頸瓶片	中世?	遺構形態より中世土 壙墓の可能性あり
02	10	Bu-25	100×95×70	円形	逆台形	なし		なし	中世?	遺構形態より中世土 壙墓の可能性あり
03	10	Bs-26	124×69×79	梢円形	逆台形	なし		大平鉢 扇打器	中世?	遺構形態より中世土 壙墓の可能性あり
04	10	Bn-24	-×96×70	(梢円形)	逆台形	なし		打製石斧	中世?	遺構形態より中世土 壙墓の可能性あり
05	10	Bp-23	130×96×69	(梢円形)	逆台形	SK06を切る		縄文土器片	中世?	遺構形態より中世土 壙墓の可能性あり
06	10	Bp-22	115×-×56	(梢円形)	逆台形	SK07を切る SK06に切られる		なし	中世?	遺構形態より中世土 壙墓の可能性あり



擇図10 SK01～SK11

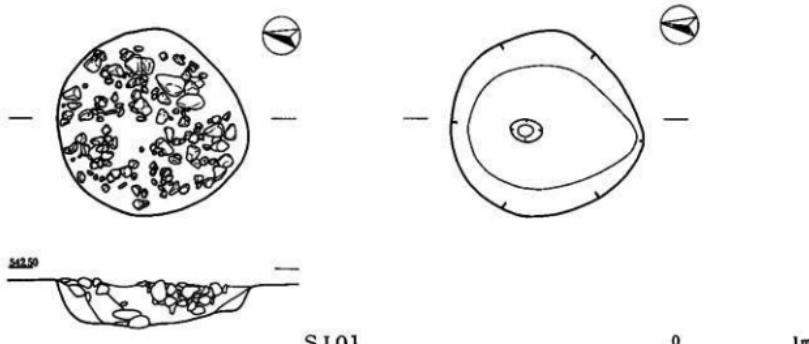
No	図	検出位置	規 模 長×幅×高cm	平 面 形	断 面 形	重 複 関 係	出 土 遺 物	時代時期	備 考
07	10	Bo-22	125×-×29	(橢円形)	逆台形	SK06に切られる	なし	中世?	造構形態より中世土 壙墓の可能性あり
08	10	Be-18	130×130×27	円形	逆台形	なし	灰釉長路瓦片	中世?	造構形態より中世土 壙墓の可能性あり
09	10	Bf-16	170×148×11	橢円形	三状	なし	なし	中世?	造構形態より中世土 壙墓の可能性あり
10	10	Bg-18	180×175×87	円形	逆台形	なし	打製石斧	中世?	造構形態より中世土 壙墓の可能性あり
11	10	Be-18	165×160×65	円形	逆台形	なし	なし	中世?	造構形態より中世土 壙墓の可能性あり
12	11	Bf-18	138×138×68	円形	逆台形	なし	なし	中世?	造構形態より中世土 壙墓の可能性あり
13	11	Au-48	120×-×73	不明	逆台形	なし	繩文土器片	繩文?	
14	11	Av-48	71×-×48	(円形)	逆台形	SD07に切られる	繩文土器片	繩文?	



SK12

SK13

SK14



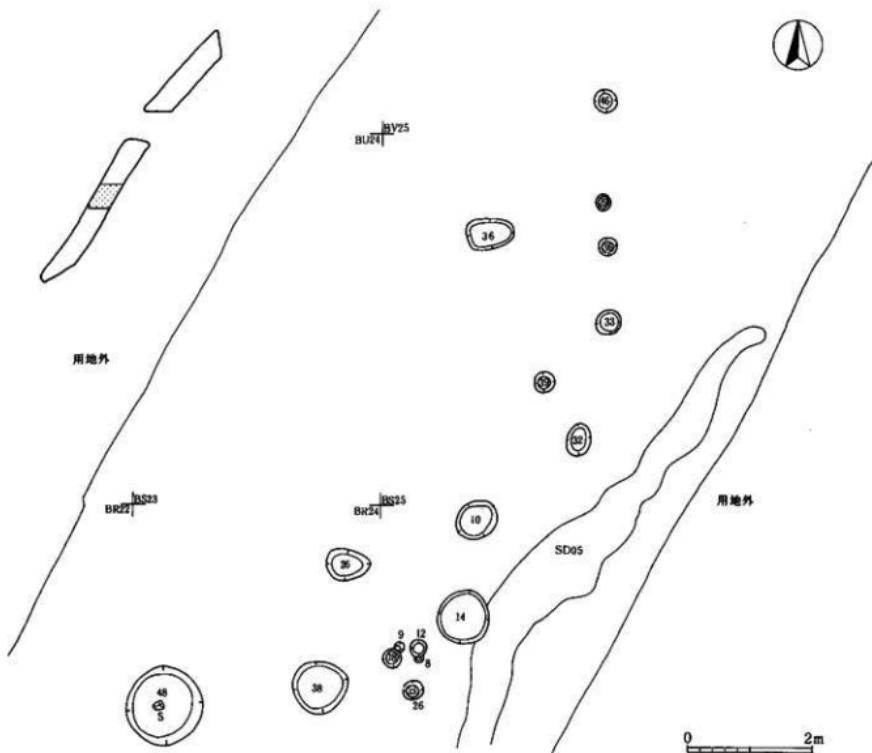
挿図11 SK12~14・S101

5 集石土坑 (S I)

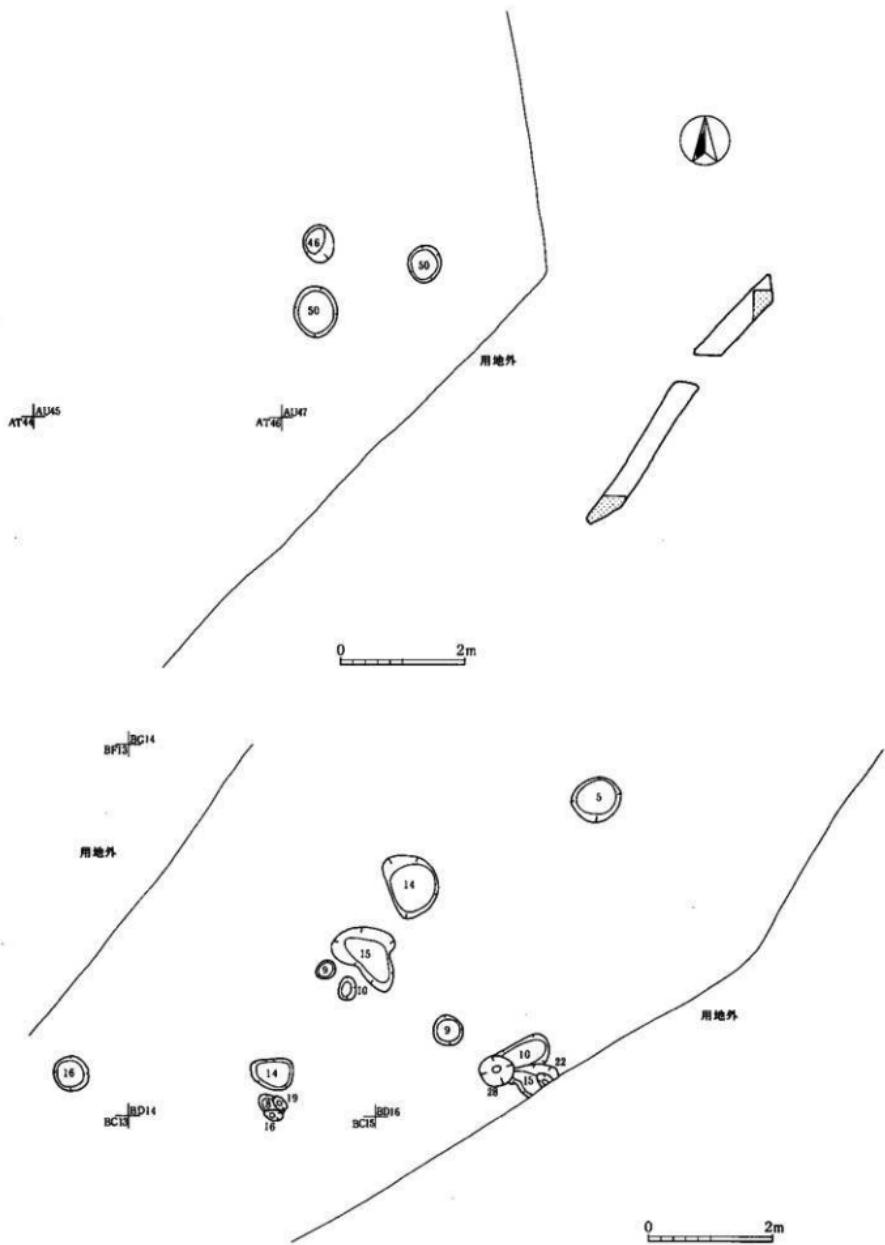
No	図	検出位置	規 模 長×短×深cm	横 面 形	断面形	重 複 関 係	出 土 遺 物	時代時期 備考
01	11	A w-48	158×158×38	楕円形	皿状	なし	縄文土器片	縄文時代

6 ピット (挿図12・13・14)

各遺稿の説明は省略し、平面図のみ示す。



挿図12 周辺ピット (1)



擇図13 周辺ピット (2)

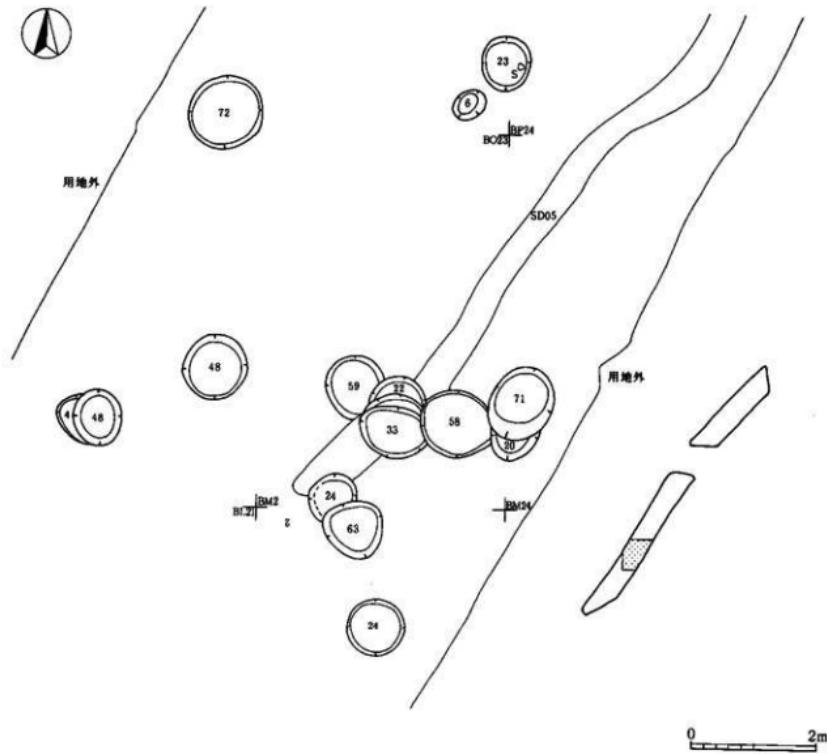


図14 周辺ピット (3)

IV 総括

調査結果は以上のとおりである。造構・遺物等充分に分析・考察が出来なかつたが、問題点を提示し、総括としたい。

1 SD01出土土器について

自然流路であるSD01から、縄文時代晚期終末の土器群を検出した。前章では大きく東海条痕文系土器と氷式土器系と二分類したが、十分に検討すれば当地方独自の土器群が抽出出来る可能性がある。多くの土器群は氷I式土器期の範疇で捉えることができ、細分すれば氷I式中～新2あたりであろう（編年観は（小林・宇佐見 1998）に準拠する）。ただ、2-13・14のような浮線文モチーフが沈線文化した土器群があることなどから、氷II式期までの幅を考えた方がよい可能性もある。条痕文系土器については東海編年での櫻玉式期の範疇で捉えられ、次段階の水神平式期まで下りそうな資料は出土していない。

中部高地に於ける該期の問題点は、東海条痕文系土器と氷式土器との併行関係が最も重要な点の一つと考えられ、東海地方文化の流入口である飯田・下伊那地域での様相がこの問題の解決の鍵と考えられる。しかし今次調査の資料は、自然流路から出土していることより、所謂一括資料としての取り扱いが困難なため、問題解決の糸口とすることは難しい。しかし、伊那谷南部に於ける条痕文系土器と氷式系土器の比率に於いては、従来から言われていた条痕文系土器が主体である、ということについては証明されたと言えるであろう。

該期の遺物は愛知考古学談話会に於いて集成（市沢・百瀬 1985）されて以降、少数であるが当地域に於いて増加してきた。報告された遺跡は、飯田市上郷（調査・報告時は上郷町）矢崎遺跡（上郷町教委 1988）・高森町深山田遺跡（高森町教委 1994）・高森町大宿遺跡（高森町教委 1994）・阿南町根吹遺跡（阿南町教委 1995）がある。矢崎遺跡出土土器は百瀬長秀・中沢道彦両氏等によって詳細な分析及び位置づけがなされており、氷I式土器に先行する離山式・離山段階とされている（百瀬 1998）（中沢 1998）。他の遺跡出土土器はそのほとんどが土器棺墓として出土している。いずれも東海条痕文系土器が主体となっているが、条痕文系と氷式系が合わせて土器棺となつており、前述した両者の併行関係を考える上に於いては重要な資料である。いずれにせよ、当地域に於いては類例の少ない資料であるため、本遺跡出土土器も交えて充分な検討が必要であろう。

2 弥生時代について

今次調査に於いては該期の資料として、竪穴住居址1軒と後期と考えられる遺物が出土した。住居址・遺物とも断片的な資料のため、詳細時期は不明であるが、昭和45年度調査に於いて確認された資料とほぼ合致する。

從来から当地域の弥生時代集落研究では、前・中期は天竜川流域の沖積地に集落が集中し、後期に至るに従い中位～高位段丘に集落が拡散してくるのは、その生産基盤の主体が陸耕であったためとされて

いる。しかし、該期の集落調査が進むにつれて、やはり後期集落も沖積地の方が大規模且つ継続的な集落が多いことが判明してきた。このことは生産基盤の主体が水田経営であり、沖積地の方がより容易に及び継続的に水田経営が可能であったためと考えられる。陸耕の主たる根拠の一つである打製石斧は、沖積地の遺跡でも多量に出土する。また、中位～高位段丘上の集落は単発的なものが多く、長期的に継続したと思われる集落は少ない。このことは生業という一端から見れば、沖積地に於ける水田に比較して中位～高位段丘上の水田耕作可能地は、小規模で生産効率が悪く、且つ連作不可能であったためと考えられる。あくまでも生産基盤の主体は水田耕作であり、陸耕は従属的なものであったことは否めない。しかし、安藤広道氏は「沖積地の集落は水田稲作中心、台地上の集落は畑作や狩猟中心といった図式が一般化できるほど、各地の集落・集落群のあり方は単純ではな」く、集落の立地条件は生業優先だけではなく、敢えて不便な場所に居住したと言うことは「多様な侧面を加味した解釈が必要」であると述べている（安藤 2003）。正鶴を射た意見であろう。本遺跡に於いても同様、今後の研究に期待するものである。

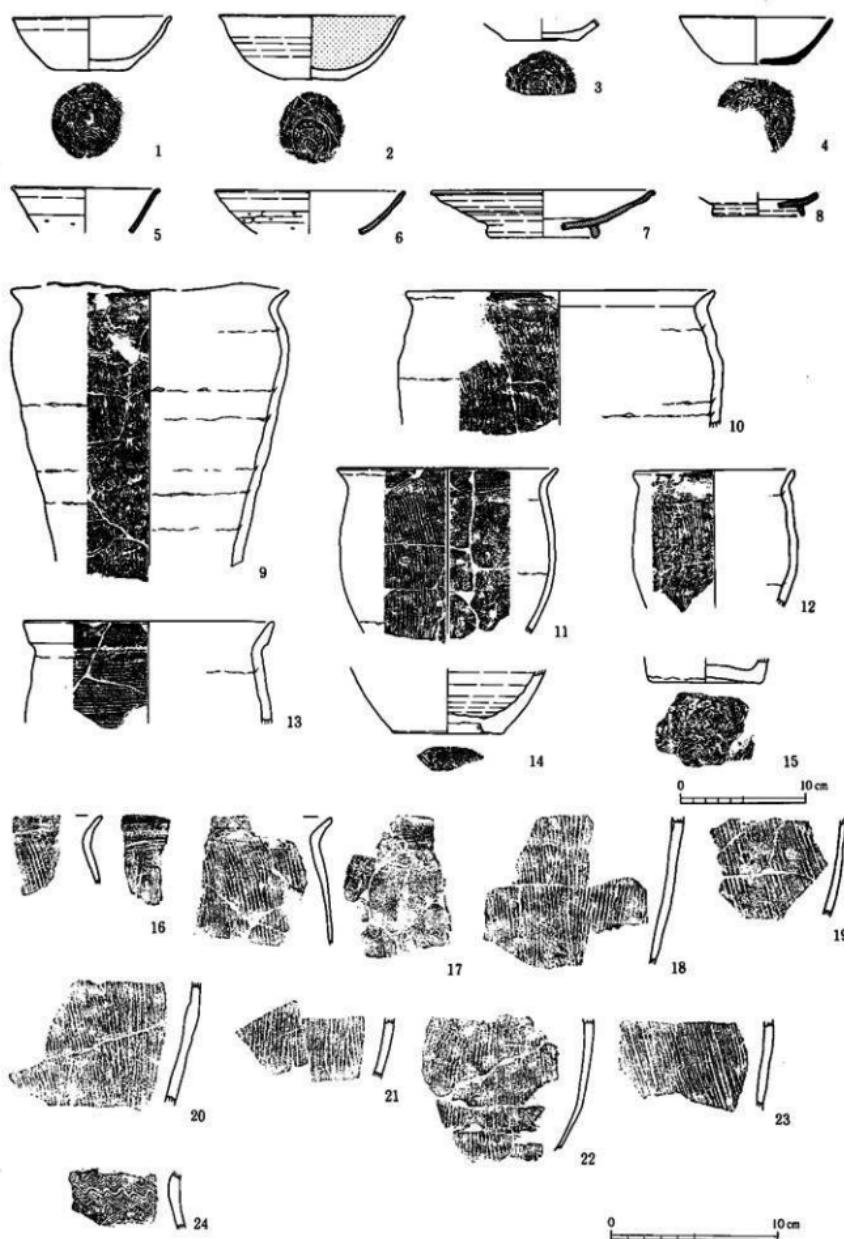
以上問題点のみを提示しただけであったが、時間的制約及び担当者の努力不足が要因である。特に縄文晩期終末土器群については充分な資料の分析等が出来なかった。多くの関係各位の御指導・御批判を仰ぎ当該期の様相を究明していきたい。

本遺跡は市街地から離れているため、大規模な開発等がなく比較的良好に保存されてきた。しかし、市道開通の後は諸開発が進むものと思われるため、今後の保護が更に必要になってくる。

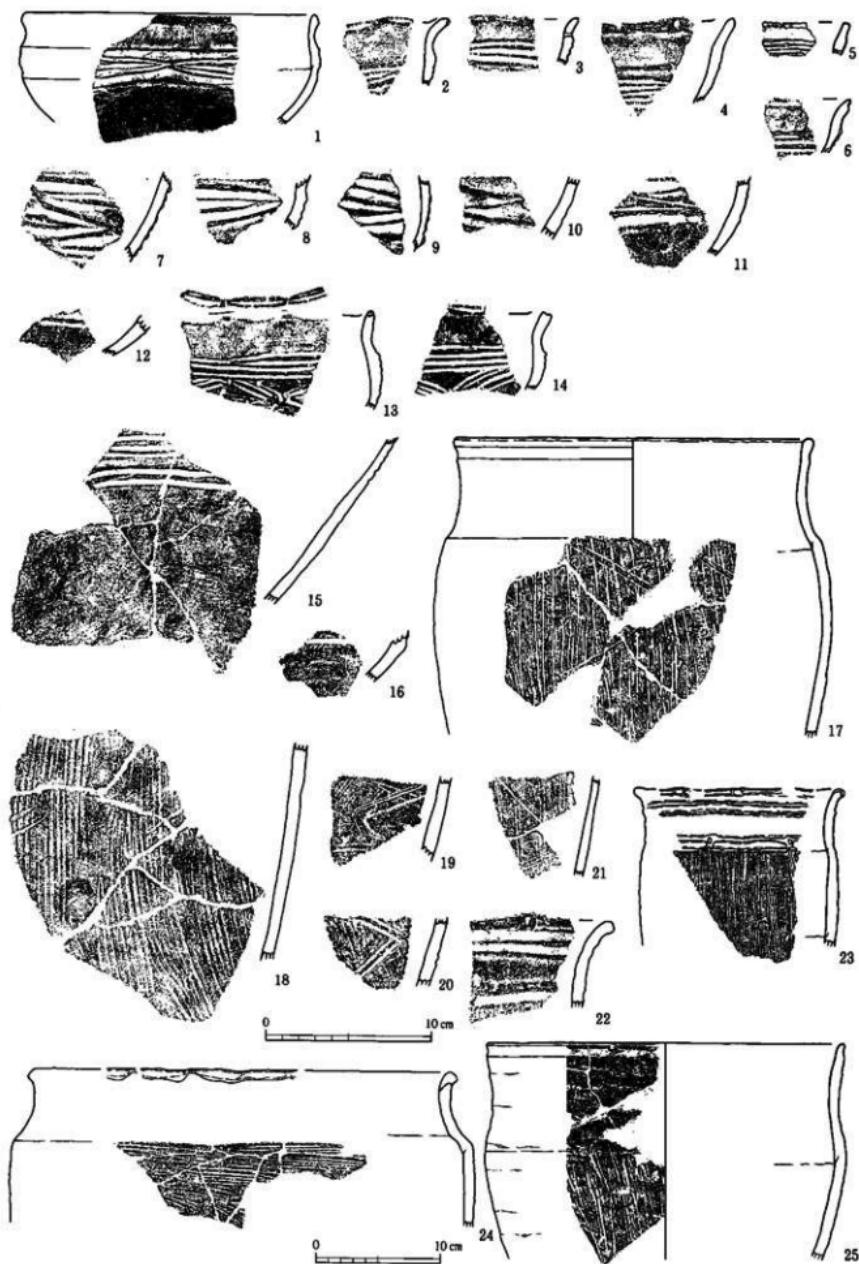
【引用参考文献】

- ・阿南町教育委員会 1995 「根吹」
- ・安藤広道 2003 「弥生時代集落遺跡研究の問題点」 平成15年度関東甲信越静地区埋蔵文化財担当職員共同研修協議会 研修資料
- ・市沢英利・百瀬長秀 1985 「長野県」 『(条痕文系土器)をめぐる諸問題 資料編1』 愛知考古学談話会
- ・宇佐見哲也 1998 「水式土器群の変遷」 -水I式土器から水II式土器への型式変遷に関する予察- 『水遺跡発掘調査資料図譜』第三冊
- ・上郷町教育委員会 1988 「矢崎遺跡」
- ・小林青樹・宇佐見哲也 1998 「3 水式土器の研究」 『水遺跡発掘調査資料図譜』第二冊
- ・高森町教育委員会 1994 「深山田・広庭・ヨシガタ・大宿遺跡」
- ・中沢道彦 1998 「水I式」の細分と構造に関する試論」 『水遺跡発掘調査資料図譜』第三冊
- ・永井宏幸 1998 「伊勢湾周辺における浮線紋系土器群の様相」 『水遺跡発掘調査資料図譜』第三冊
- ・百瀬長秀 1998 「細密条痕小考」 『水遺跡発掘調査資料図譜』第三冊

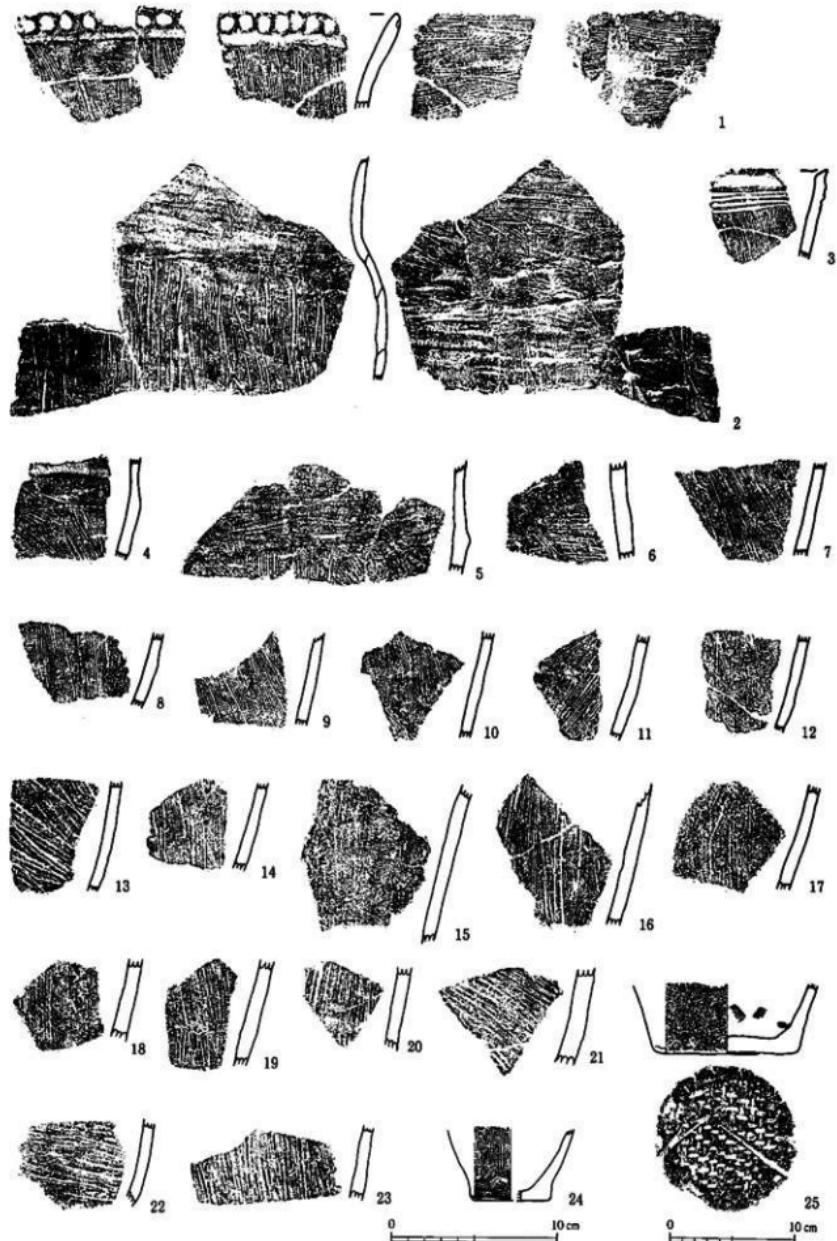
図 版



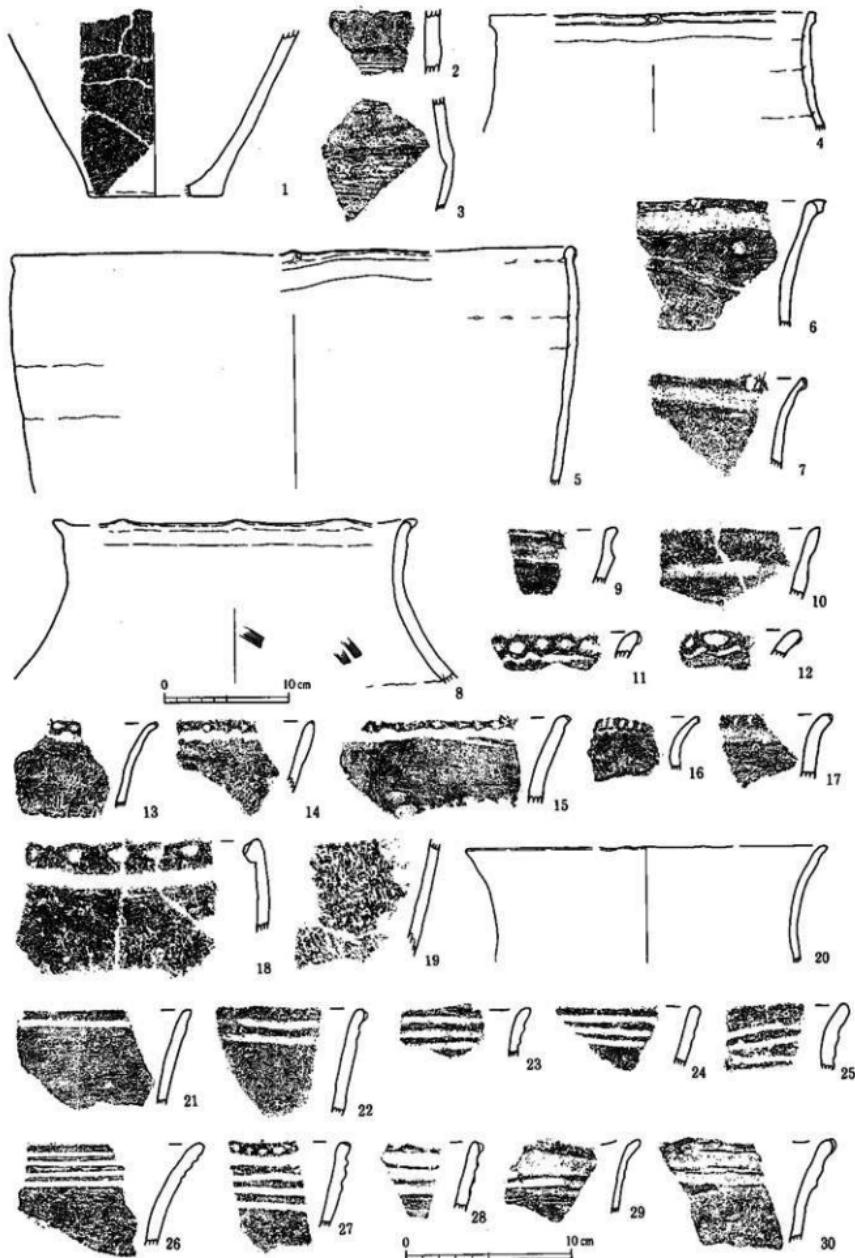
第1図 出土土器 1~23、SB01 24、SB02



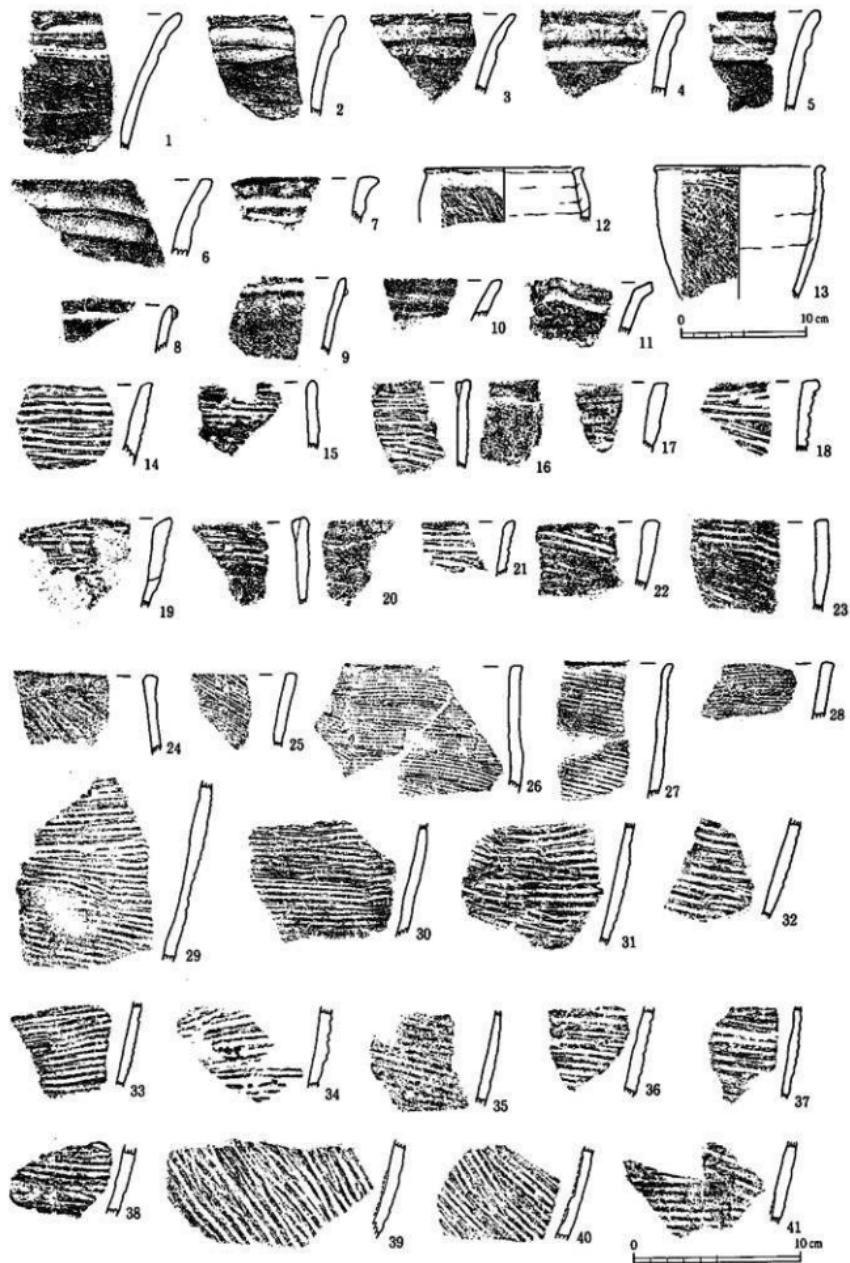
第2図 SD01 出土土器



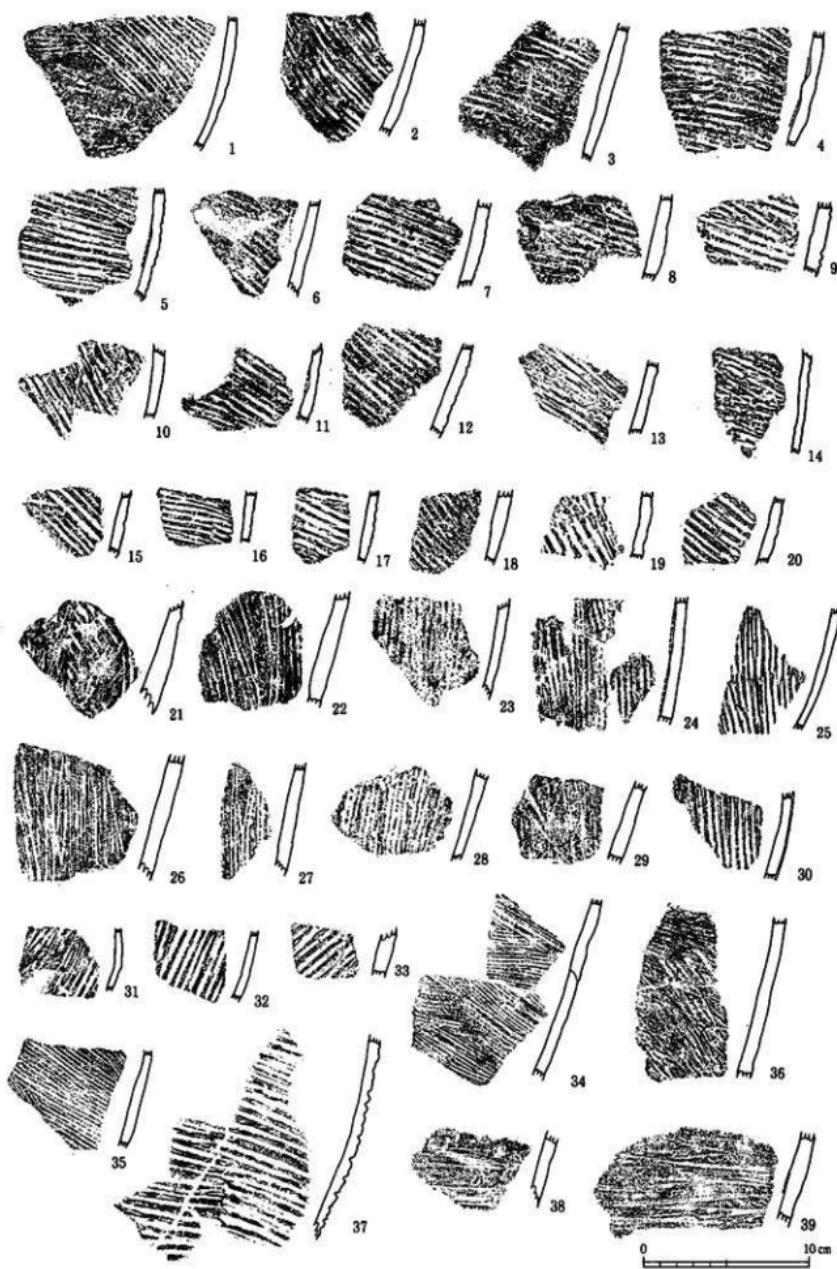
第3図 SD01 出土土器



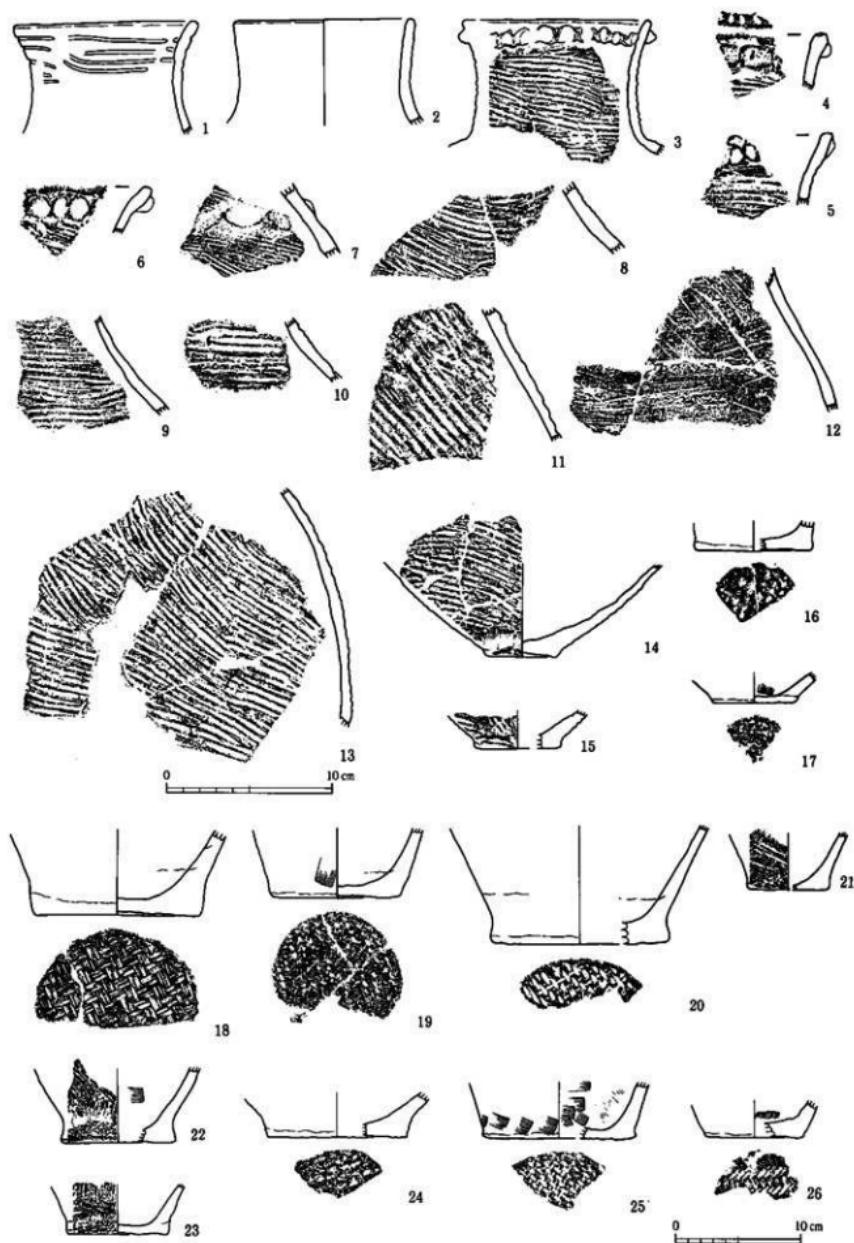
第4図 SD01 出土土器



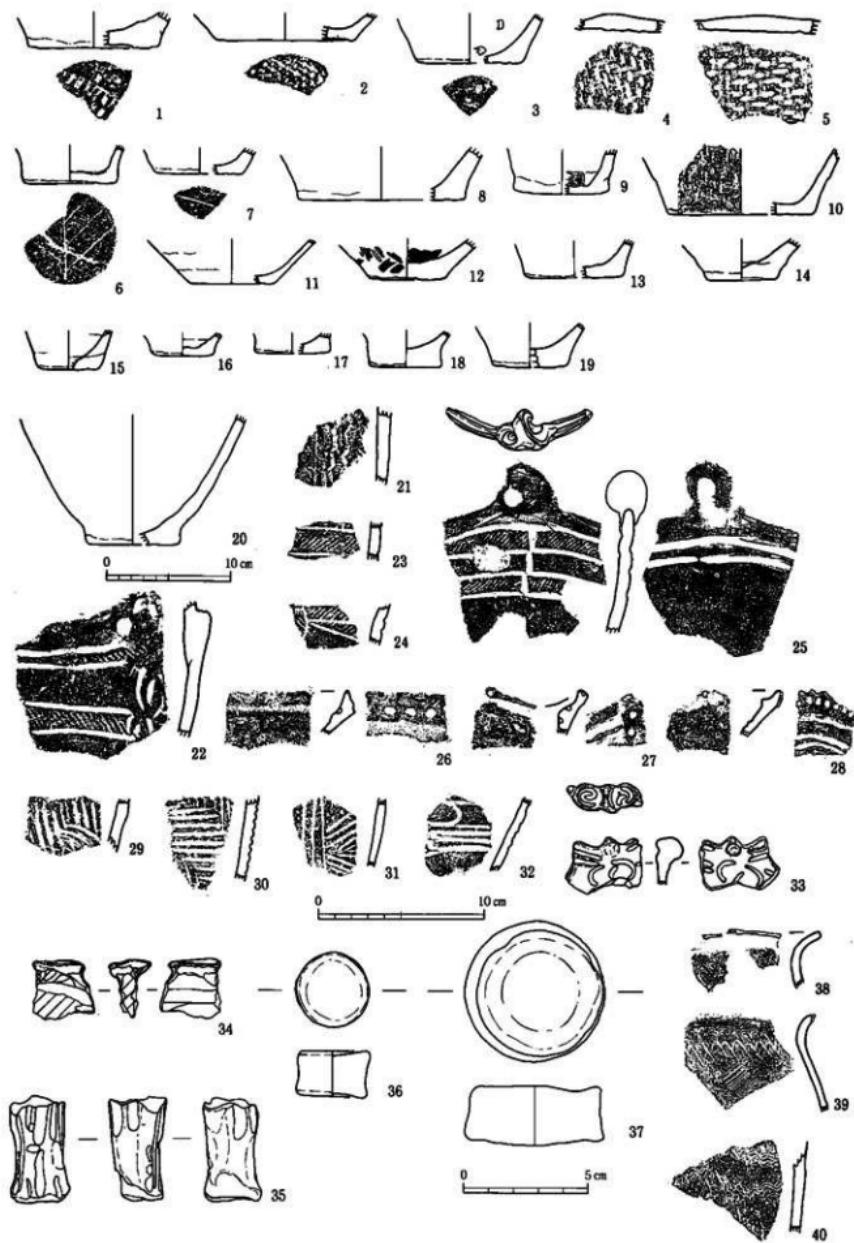
第5図 SD01 出土土器



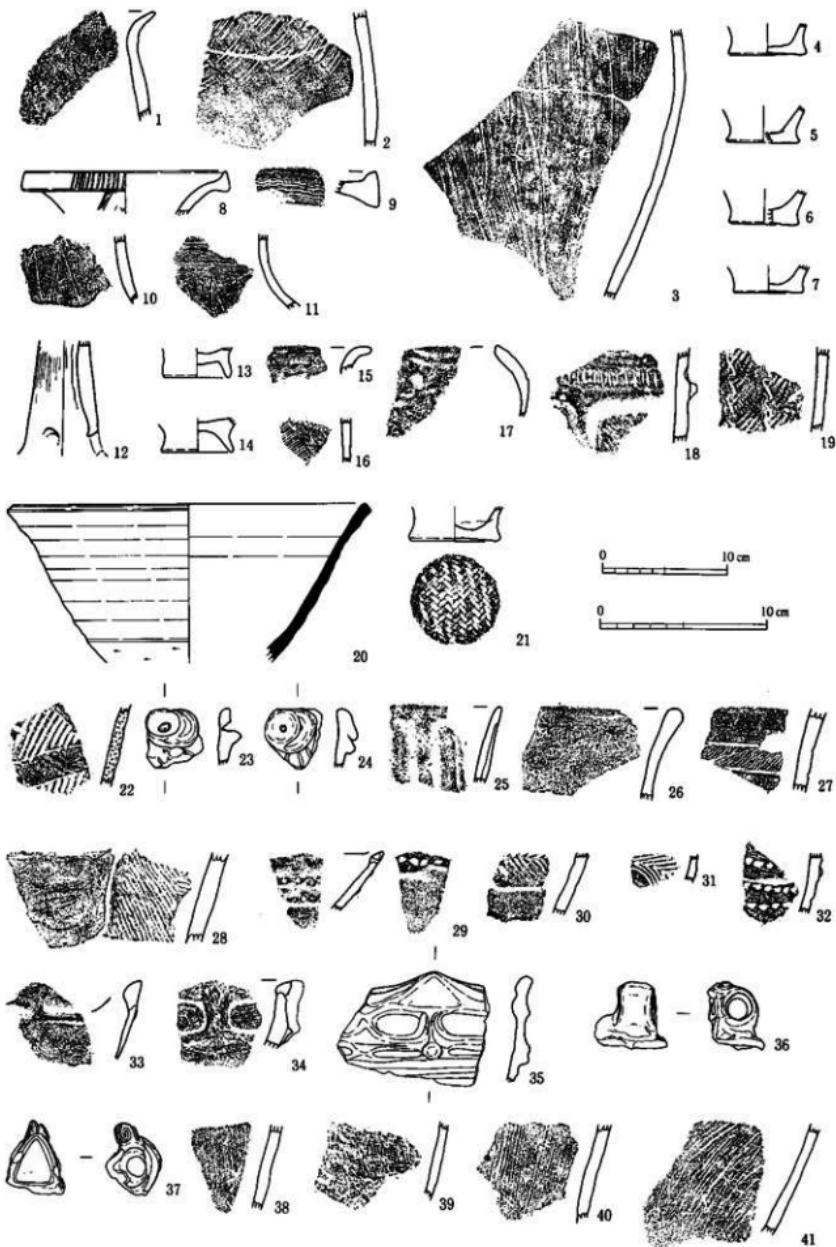
第6図 SD01 出土土器



第7図 SD01 出土土器

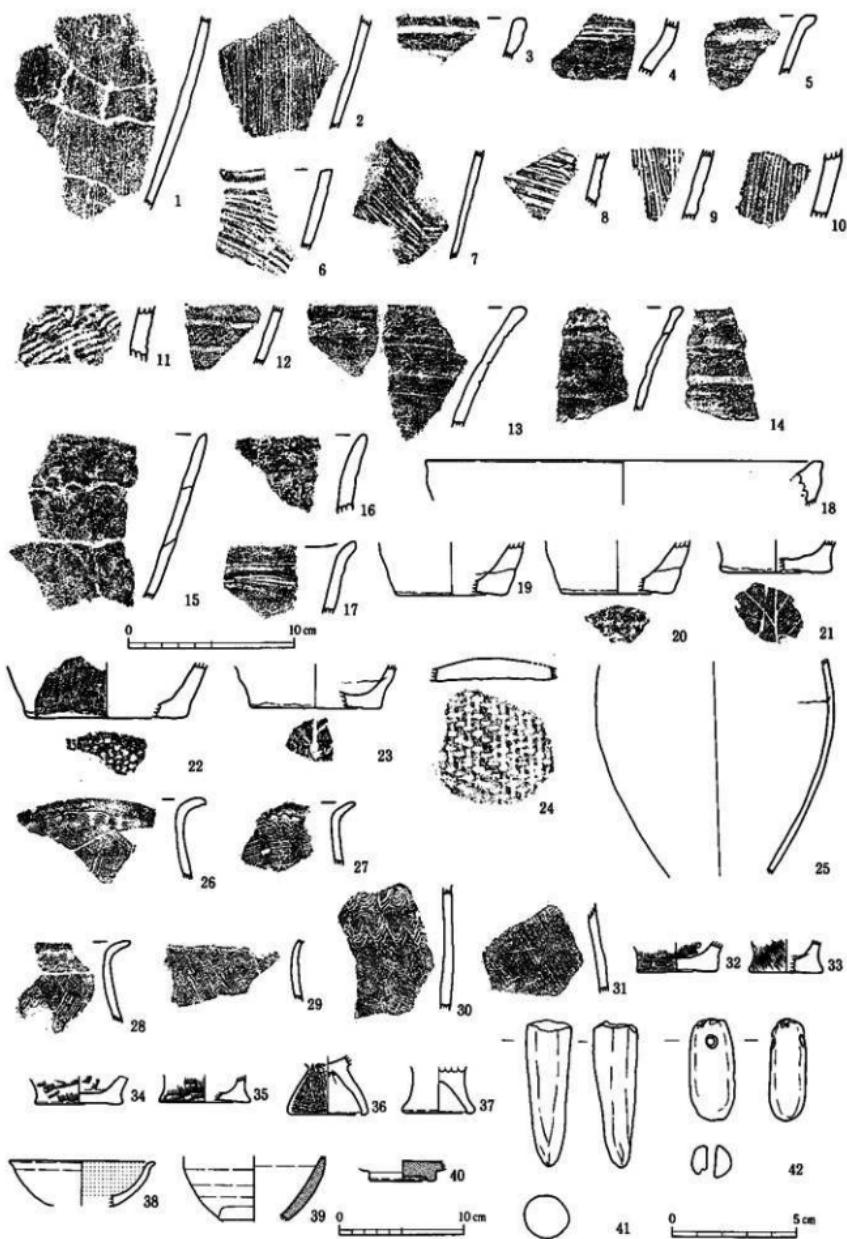


第8図 SD01 出土土器

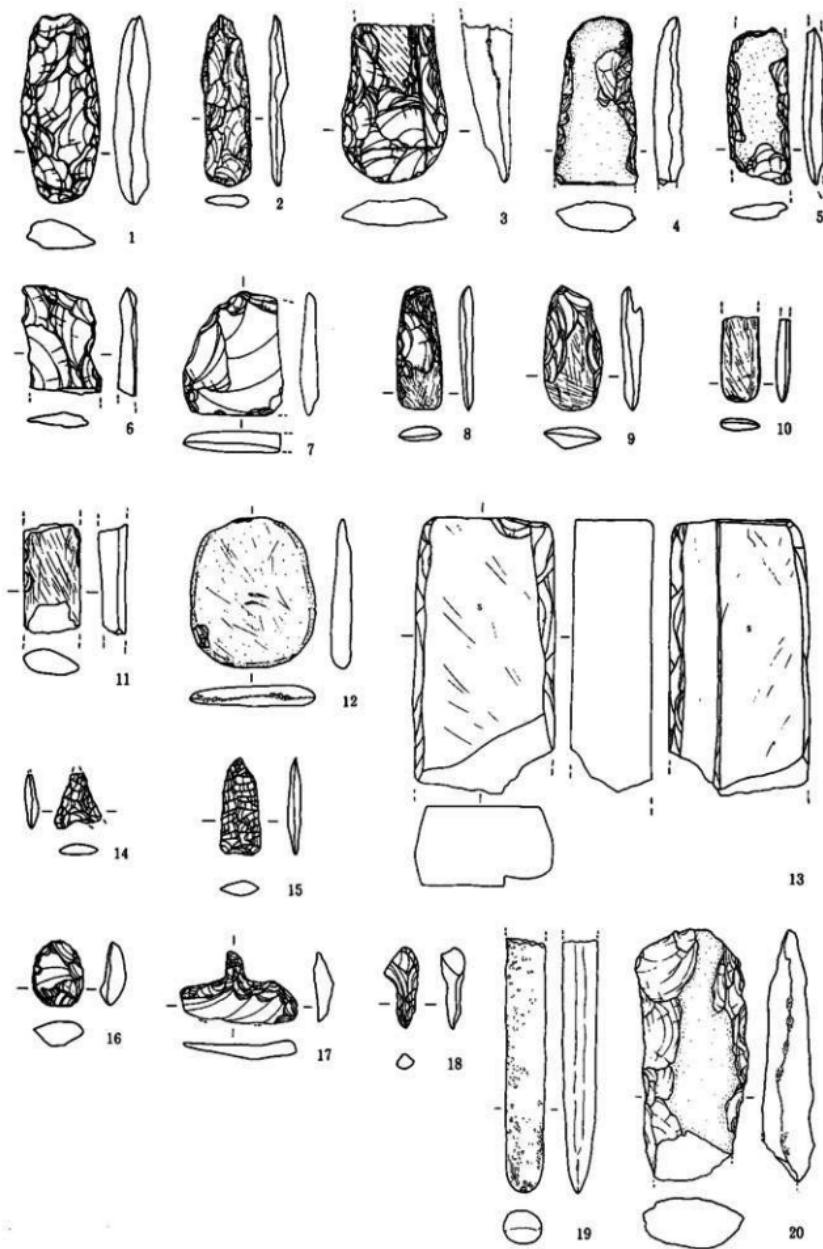


第9図 出土土器

1~14、SD01 15~16、SD06 17~19、SD07 20、SK03 21、SK14 22~24、遺構外



第10図 出土土器 1～42、遺構外



第11図 出土土器 1～19、SD01 20、SD07



第12図 出土土器 1、SD07 2、SK03 3、SK04 4・5、SK10 6～19、追構外

写 真 図 版



調査区全景（部分）



同上



同上

写真図版 2



調査区全景（部分）



同 上



SB02





調査スナップ



同 上



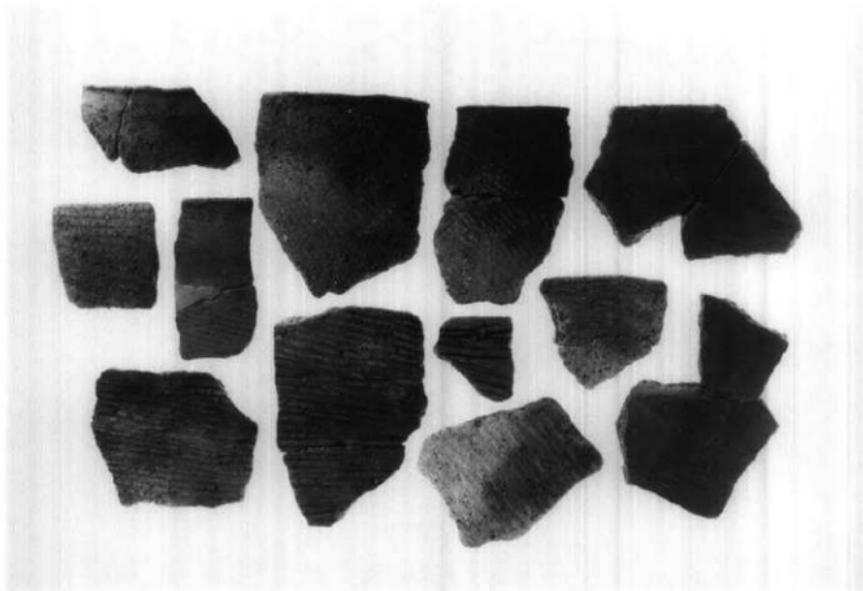
調査スナップ



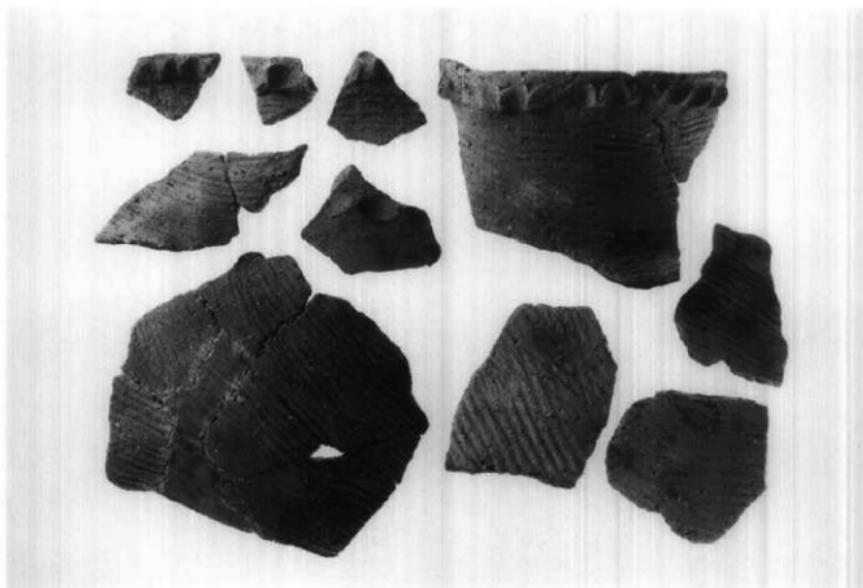
重操作業スナップ



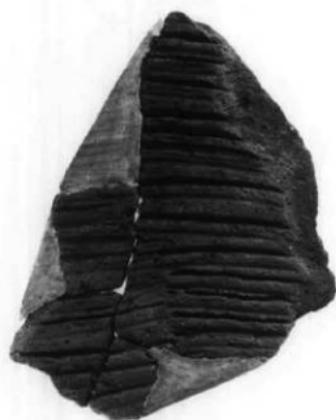
測量作業スナップ



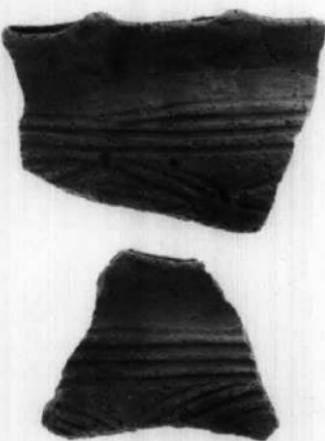
SD01 出土遺物



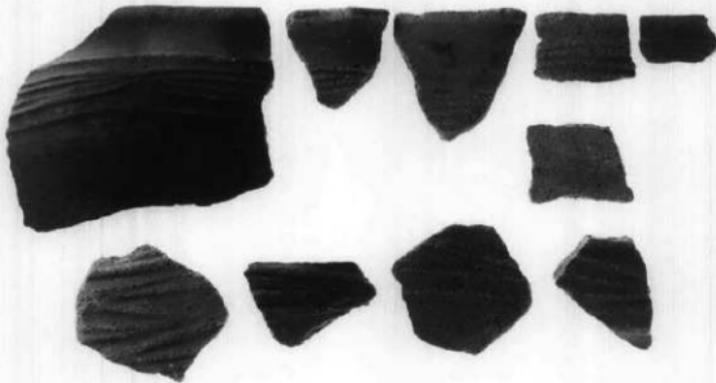
同 上



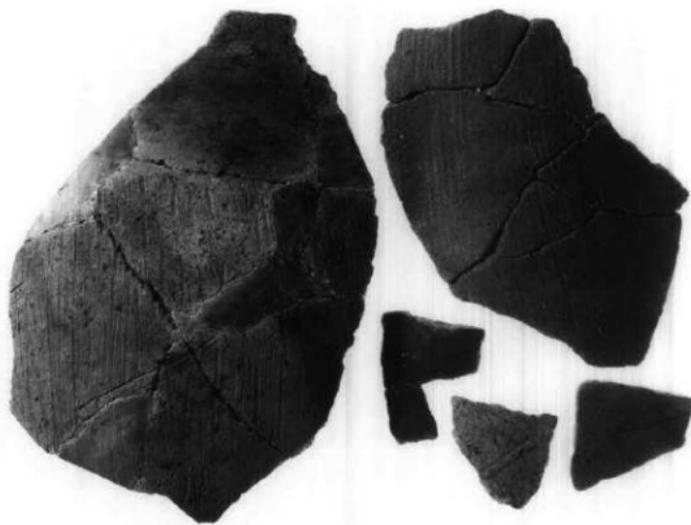
SD01 出土遺物



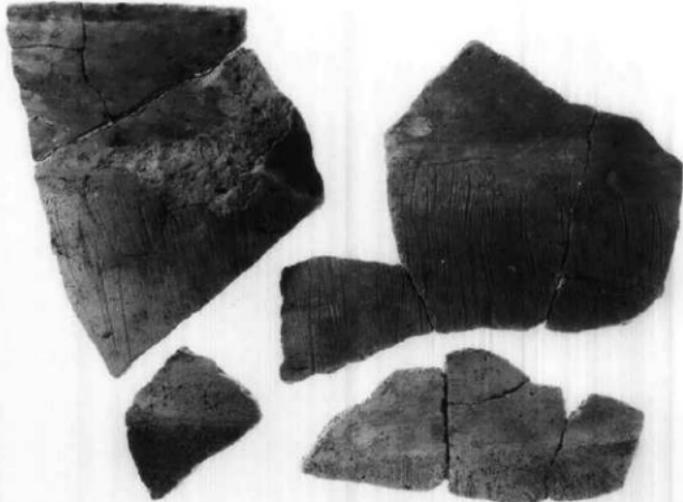
同 左



同 上



SD01 出土遺物

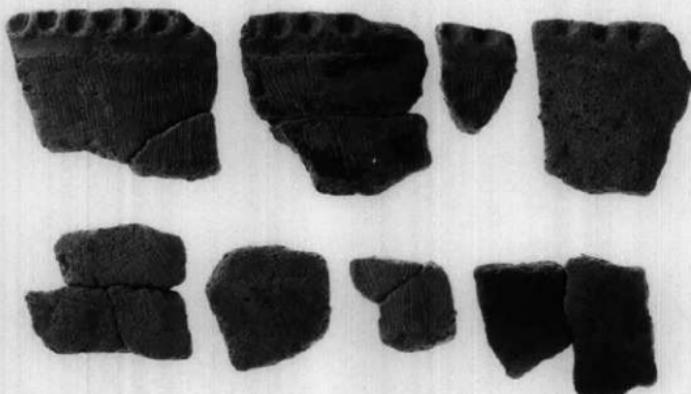


同 上

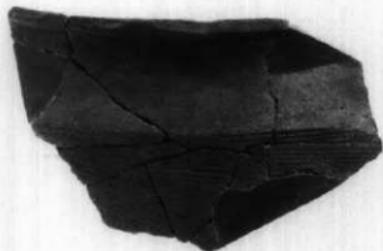


同 左

SD01 出土遺物



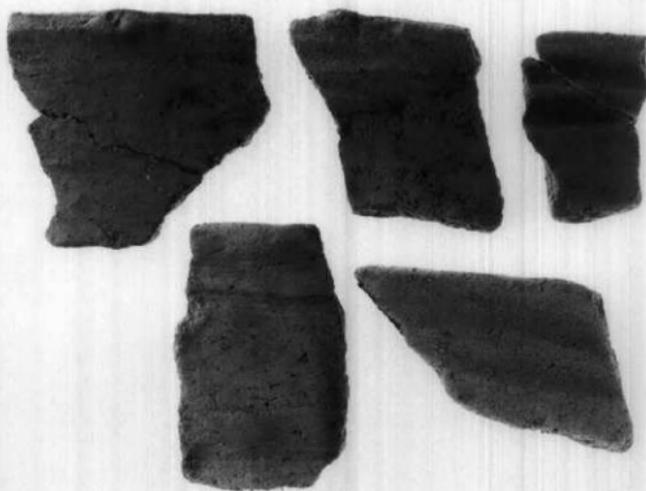
同 上



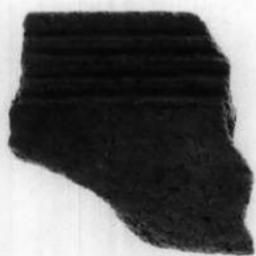
SD01 出土遺物



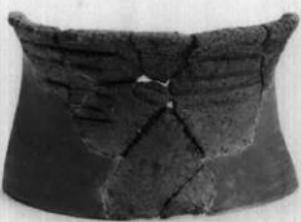
同 左



同 上



SD01 出土遺物



同 左



同 上



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ごんげんどうまえいせき						
書名	権現堂前遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	吉川金利						
編集機関	飯田市教育委員会						
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 ☎ 0265-22-4511						
発行年月日	西暦2004年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
権現堂前遺跡 飯田市 羽場権現 1190-3他	飯田市 羽場権現	20205	35° 30' 59"	137° 48' 21"	2002年 7月1日～ 9月24日	890m ²	市道新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
権現堂前遺跡	集落址	縄文時代 弥生時代 平安時代	竪穴住居址 1 竪穴住居址 1	晩期終末土器 須恵器 灰釉陶器	縄文晩期終末土器が 自然流路より出土		

ごんげんどうまえいせき
権現堂前遺跡

2004年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
長野県飯田市教育委員会
印 刷 飯田共同印刷

